

法華經を余人の読み候は

口ばかり言葉ばかり読めども心は読まず
心は読めども身に読ます

色心二法ともに遊ばされたることそ

貴く候へ

日蓮聖人・土籠御書

龍
馬

峰



二月号

第4卷 第2号

通卷 第27号

鷲峰二月号 目次

卷頭の言葉

本仏の淨土は嚴然としている

自我偈講義　久遠の本仏と人間釈尊　その八

日蓮聖人の大曼ダ羅と本仏釈尊の關係　日高白象

親の恩・国の恩　田中資郎

天皇・皇后両陛下を

我が職場にお迎えした日に　花房毅

何時かは必ず法華経を進講し奉らんと期しつゝ

立正安國と王仏冥合(その二)　日高白象

或る日の仏陀へその一▽

琴の糸にたとえて…………… 沢田覚象

読者の声

創価学会の自己批判と身延山の体制……阿野貞重

釈尊の入滅と日蓮聖人の生誕……………和田龍昌

日蓮聖人は像法の人か

信仰相談室

唱題の心のおきどころ……………日高白象

節 分 に つ い て	お題目と末代の幼稚
第六回鷲峰行学講習会案内	……………
第九回身延山青年行学講習会案内	……………
編 集 後 記	……………

表紙題字……………身延山法主藤井日静猊下
表紙写真……………インド電鷲山へ渡つた身延山金銅の釈尊像

嚴然としている

「釈尊が入滅された」

これは釈尊在世中の仏弟子たちにとつては天地もくつがえすような一大打撃でした。打撃は、その後二千数百年もの間、深く仏教徒の心底に食い入つて来ました。今でも「釈尊は死んだもの」と思い込んで、現滅の釈尊の奥に、或はそれ以外に、不滅の本仏を求める本仏を体として釈尊を影とみなす、という仏教徒が何と多いことでしょう。彼等は釈尊の常住も、その浄土の実在も知らないのです。

然るに法華経では、釈尊みずから靈山虚空会の儀相を整えながら「しかも実には滅度せず、常にこゝに住して法を説く」と宣明されており、またその浄土にしても、

「我が此の土は安穏にして、天人常に充满せり……」

と教示されています。法華経を信ずるとは、靈山八品虚空会上の人間釈尊そのものが、久遠実成の本仏として不滅なることを確信することであり、その浄土もまた、娑婆に即して尽十方に、厳然として実在していることを確信することです。日蓮大聖人はこれを確信されていました。そして確信する此の実在を、靈山虚空会の儀相に照しながら、末法應時の日本国に当て、図顯されました。それが仏

は淨土の仏本

滅後一闇浮提内未曾有の大マンダラであつたのです。

この大マンダラの中央には、光明点の筆法をもつてお題目が大書されていますが、このお題目こそ本仏釈尊の因行果徳の二法として十方仏土の中では燐然たる大光明となつて輝き、朗々たる大音響となつて轟いているのです。大聖人は、この声なき本仏釈尊常唱のお題目の声を聞き、姿なき靈山淨土の姿を徹見されたのでした。思うに法華經の信仰とは、かくの如く三千大千世界の虛空に轟く本仏釈尊の声なき声、尽十方法界に燐然たる久遠の淨土の姿なき姿を、みずから己心に感することより始まるのではないでしようか。

世の中に、如何に多くの諸仏の淨土や、神々の天国が説かれていても、それらは所詮、方便の化土にすぎません。実在する唯一絶対なる淨土、それは娑婆に即する本仏釈尊の淨土でしかないのです。しかもこの淨土は三災を離れ、四劫をも超越した常寂光土であり、如何に地上の人間世界が、暗黒の修羅斗争におかれていても、それに禍いされることなく、文字通り常に寂靜たる平和をたもちながら燐然たる光明に輝いています。また地上が原水爆に破壊されなんとしても、本仏の淨土は微塵も搖ぐことなく嚴然としているのです

久遠の本仏と人間釈尊 ▲その八▽

日蓮聖人の大マンダラと

本仏釈尊との関係

日 高 白 象



昨年の五・六合併号に至るまで、前後七回に亘つて連載していた自我偈講義は、その初頭「久遠の本仏と人間釈尊」ということを主題として、

——日蓮大聖人の本尊觀においては、法華經靈山虛空會上本門八品における人間釈尊そのものを、久遠実成の本仏と仰ぐものであり、この釈尊の奥に、更に不滅の本仏を求めたり、或はこの釈尊以外に、別に本仏を求めたりするものではない——

ということを述べ、その傍証として法華經順説の場合（迹門位本）における悪人提婆達多の成仏や、二乘の成仏、成は常不輕菩薩の人間礼拝、という数々の実例を掲げ、その本義を全うせしめているものは、実は法華經逆説の場合（本門位本）における本仏釈尊であり、順説時の釈尊と、逆説時の釈尊とは、一往、本迹の相違はあるようではあつても、それは文上のことで、あつて、一重たち入つた文底においては、迹門における

る人間釈尊も実は本門の釈尊……久遠の本仏そのもの

り。

に外ならないものであつた、ということを明かにしながら、

——虚空会の本門八品における人間釈尊こそ、久遠

九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備わりて、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。

の本仏そのものである……

という反証を試みて來ました。

このことについては大聖人が、みずから開日鈔の中で、

述門方便品は一念二千・二乘作仏を説いて、爾前二種の失の一つを脱れたり。然りと雖も、未だ発迹頗本せざれば、実の一念三千も現われず、二乘作仏も定まらず。水中の月を見るが如し、根なし草の波の上に浮べるに似たり。

本門に至つて、始成正覚を破れば、四教の果を破る。四教の果を破れば、四教の因破れぬ。

爾前述門の十界の因果を打ち破つて、本門の十界の因果を説き頗わす。これ即ち本因本果の法門な

と示されている通りです。

このお言葉は大変難解な教えのようですが、要は釈尊の久遠が開頭されていない述門位本の立場だけでは人間の成仏は完成しないものであつて、本門における釈尊の久遠開頭が定まるところによつて、本仏果海中の十界において、はじめて悉皆成仏の完成を見ることが出来る、ということです。

然しながら、法華經の述門においては、既に二乗の成仏が定つているように述べられています。これは、述門の裏面に即して、既に本門の大教が顯れて来ているものであり、述門の釈尊の陰に即して、本門の釈尊の久遠実成、並に本仏の仏界常住が、既に冥々裡にあらわれていることを物語つてゐる、といわれるべきで

ありましよう。

本講は、このように傍証を固めながら、論述して来たはずであります。そして次に当然起つて来る問題として、

「日蓮大聖人が凶頬された大マンダラと本仏釈尊との関係」

ということについて、いよいよ正面から取り組もうとしたのですが、折から驚峰会の行学道場としている醒悟園本妙庵の、周辺の復興開発事業が、地元の波木井区民の総意によつて本格的となつて來たため、勢い全力を、その方へ集中せざるを得なくなり、その結果本誌の発行も合併号に合併号が重なり、自我偈講義そのものも休載状態となつて、しかも、これが今日までおよそ半年間もつゞくという状態になつてしまつたわけであります。

本講に対して心から御期待・御声援下さつた読者皆様には、誠に面目もなく、お詫びの致しようもない次

第であります。幸い、本妙庵復興開発事業も、地元区民の熱誠によつて、ようやく軌道に乗りつゝありますので、こゝに再び本講論述の筆を起し、

「釈尊即本仏」

という根本問題を究明しながら、自我偈の経文解釈を進めて行きたいと思います。

然しながら、これまでの宗門教学史上、本尊問題に関する人本尊・法本尊・或は人法一体の本尊等々、その論争は多年の間、華々しく展開されて來ながらも、その中にあつて、法華經虛空会上の本門八品における人間釈尊こそ久遠実成の本仏そのものである。

ということを明確に主張した先例は、誠に乏しいものであるだけに、この論証には、今後なお多くの紙数が必要であると思われます。

それにしても、この問題を究明しておかなければ、如何に自我偈の経文解釈を進めてみたところで、所詮

根なし草の波間にたゞようが如きものとなつてしまふ恐れがありましよう。

むしろ釈尊本仏論を究明すること自体、自我偶を講義せんとする目的の、その半ばを達している、と言つても過言ではないのです。従つて本講は、前回につゝいて今後とも、なお暫く「久遠の本仏と人間釈尊の関係」という主題について述べて行きたいと思ひますので、この点、御了承の上、更に御意見・御批判をたまわりたいと思います。

前置きが長くなりましたが、本講専開に当る第八回目は、「久遠の本仏と人間釈尊」という主題の中「日蓮大聖人が図顯された大マンダラと本仏釈尊の関係」から述べてみることにいたしましよう。

さて日蓮宗の宗憲によれば、

「日蓮大聖人専定の大マンダラを以つて本尊とする」

というように明示されていますが、大聖人が御在世中に図顯された、現存する百二十数幅の真蹟大マンダラの中、そのいずれを選択するか、ということは別として、この宗憲に異論のある人はないと思います。

宗門の歴史をふりかえつてみれば、日蓮大聖人滅後およそ百年から二百年の頃までは、大マンダラを本尊とするよりも、一尊四士（本仏釈尊と、その脇上である上行・無辺行・淨行・安立行という地涌の四大菩薩）を本尊とする方が、優位であつたようですが、その後は、一尊四士本尊よりも大マンダラ本尊の方が優位となつて、今日まで至つており、たとい一尊四士を本尊としても、大マンダラ本尊を否定したものではなく、大聖人自身としても大マンダラを弟子檀越に授与されるに当つては、確かに本尊として授与されておられるのですから、本尊に関する日蓮宗の宗憲は、決して誤つたものではないというよりも、むしろ当然の正しいものといえるでしよう。

然し問題は、この大マンダラと本仏釈尊との関係にあるのです。というのは、このことに関して、次のような意見が流出しているからです。

一、久遠実成の本仏釈尊も本尊であり、大マンダラも微したものである。

一、大マンダラの中心は、その中央に大書されている

お題目であり、お題目は本仏釈尊の「事の一念三千」を現わし、お題口を開けば本仏界上の十界互具・百界千如・一念三千の大マンダラとなり、大マンダラを閉れば一邊首題のお題目となる。

一、既にお題目が本仏の内容を現わすものである以上大マンダラ中央のお題目の、向つて左に勧請されてゐる「南無釈迦牟尼仏」という釈尊は、当然応身釈尊でなければならない。

一、応身釈尊はお題目を悟ることによつて仏陀となることが出来、八十才入滅の後は、お題目の中に帰入さ

れて行かれた。従つて、たとえ釈尊は現滅無常ではあつても、お題目は常住不滅であり、我々もまたお題目を本尊とすることによつて、釈尊の如く正覚を成すことが出来る……

大体以上のような論調は、日蓮宗の殆ど大半を占めているものであり、しかも少くとも四・五百年の伝統さえ持つてゐるものであります。

然し、ここで考えなければならないことは、大マンダラ全体や、中央のお題目が、久遠の本仏の内容を開宣し、或は象徴したものであるということは妥当であるとしても、このために大マンダラの仏部に勧請されている「南無釈迦牟尼仏」という此の釈尊を、応身などみなしてしまふということは、飛んでもない誤りといふほかないかもしれません。むしろ、この釈尊こそ、久遠実成の本仏そのものなのです。

何故ならば、大聖人が因縁された大マンダラは、法華經靈山虛空会上の本門八品の儀相をあらわしたもの

であり、この限りにおいては、多宝如来と二仏並座された釈尊が、第十五章の従地涌出品において、六方恒河沙の本化地涌の大菩薩団を本眷属とするということを以つて、おのずから自身の久遠を表示するということを整えながら、第十六章の如來寿量品において、みずから明かに、

「我れ仏を得てよりこのかた、経たる所のもうくの劫数、無量百千万億載阿僧祇なり……」

「衆生を度せんがための故に、方便してネ槃を現す。しかも実には滅度せず、常にこゝに住して法を説く」

「常にこゝにあつて滅せず、方便力を以つての故に、

滅・不滅ありと現す……」

と宣言されているからです。これによれば多宝如来と二仏並座されている釈尊、則ち大マンダラのお題目

の横に勧請されている釈尊こそ、確に久遠の本仏そのものであられたはずです。こゝにおいて、

——では、お題目も本仏であり、お題目の横の釈尊も

本仏であるならば、大マンダラの中には本仏が二人いるという矛盾が起りはしないか。それとも釈尊こそ本仏と言い張る以上、お題目は本仏ではないのか

という意見も起つて来る事でしよう。

然し、こゝで靈山虚空会上の儀相を、もう一度ぶりかえつてみましよう。というのは大聖人が圓顯された大マンダラこそ、靈山虚空会上の本門八品の儀相を象徴したものであるからです。

この八品虚空会上にあつては、二仏並座された釈尊が、その本眷属を涌出し、久遠の儀相を整えられながら、みずから久遠の本体を開顯されたのですから、釈尊が本仏そのものであることには変りはないことです。が、一方、大マンダラの中央に大書されているお題目といふものは、実は釈尊が、その自内証を言案として表現し、音声として十方虚空無邊に響き渡らしめていける教法を、そのまま大聖人が色香も変えず末法の行法として大マンダラの紙面に表現されたものなのです。

親の恩・国の恩

田中資郎



1

日蓮聖人は開目録の中で、ネ槃

経の文を引用し、

「貧しい母親が、子供を背負つて
川を渡つてゐる途中、折から急に
水が増し、流れも早くなり、水力
も深くなつて、溺れそうになつ
て來た。

背中の子を捨てれば、自分は助
かることは判つていたが、母親は
我が子を助けたいと思い、遂に二
人とも溺れ死んでしまつた」

といふ逸話をもつて、母親の大

いなる慈愛を説いておられるが、
このような実例は、今日でもなお
屢々見たり聞かされたりするもの
である。

感じようが感じまいが、あたか
も太陽の光が、地上の万物に差別
なくそゝがれてゐる大自然の現象
と、全く同一の事実なのである。
ところが最近の合理的、科学的

然し、これほどの親の愛情が、
常に子供に注がれているというこ
とを、我々は果して身に感じてい
るであろうか。

考え方と称する見解からすると、

この親の行動は、非合理的な、封建的なものとして取扱う傾向が強くなつて来たように思われる。

2

曾つて戦前、

「孝とは何か」

ということについては、道徳の中心課題として扱かれたものであるが、戦後の考え方からすれば

——戦前の忠や孝は、たゞ一方にのみ強要する偏執した義務でありあまりにも封建的である——

——孝養にしても、親が子供を養育したという、親の子に対する報酬であつて、代価としての範囲の

問題にすぎない——

ということになり、合理性を思考の基準としたり行動のパロメー

ターとしては、「孝」は、もはや道徳の問題ではなく、常識的な取

引問題とされ、親の愛情ですら、個人的な単なる感情の問題に過ぎないものらしい。

3

戰後日本の家族制度も、このようないくつかの要素を含んでゐる。これらは、

——自己の生命を犠牲にするには自己の生命以上に価値ある被犠牲者の生命なり地位・財産があるといふこと。またその犠牲に対しても、

たしかに、從来の日本の家族制度の中には欠点はあつた。然しそ

るべきである——

——忠誠の代價としての代償があつて、代価としての範囲の

れ等の欠点は、徳川幕府の封建政策のために作られたものであつて本来のものではなかつたのであるところが、この欠点改造の名にかりて、本来の美しい家族制度が根底からくつがえされ、改悪された。

勿論、アメリカの占領政策の一環として行われたものであるが、まさに遊牧の民、海賊の民の如きやりかたでしかない、といえようさて、このように人間の精神生面にまでも、合理主義が侵入して、人間本来の徳性まで破壊されようとしているが、これこそ明かに唯物論的思潮の侵入であると

人形や小鳥や花や動物を愛する。仮性の自然的な発露である。この愛情に、一体何の報酬を要求する意志があろうか。

合理主義——それは「事の一念三千」の大法門すら全然理解することも出来ない、人間的靈性の一手段と低い考え方でしかない。「信仰をすれば現世利益が与えられる」

「信仰をすれば現世利益が与えられる」といふ御利益信仰の徒輩には、仏の慈悲も、親の慈愛も、そして自己本来の姿も判らうはずはない

「私が戦争の全責任を負うから、私はどのようにになつてもよい。どうか国民が、敗戦の苦しみから立ち直れるよう、いくらかでも教つて欲しい」

サードが、終戦後ほど戦なく天皇陛下と会見した時、

「私が戦争の全責任を負うから、私はどのようにになつてもよい。どうか国民が、敗戦の苦しみから立ち直れるよう、いくらかでも教つて欲しい」

曾つて占領軍総司令官マツカ一

全を考え、財産を持つて他国へ亡命するか、或はまた、何処かに生き永らえる方法はないかと、あらゆる手段を構じ、それが成功しなかつた国王は、家族もろとも悉く虐殺されている。

こうした史実ばかりある中に、アジアの一角の小さな島国の天皇から、前述のようなことを聞こうとは、マツカーサーたりとも到底考え及ばない、また割り切れないものがあつたに違いない。

キリスト教では、このようなこと立つて、これに当られるという、とは、神のみが、よく成し得ることであつて、人間は如何に修養しても、善行を積んでも、神には成り得ない、と説いている。

サートとしては、想像すら出来なかつたのも、無理からぬことであろう。

蓋し、こゝにも西歐思想と東洋思の、根本的に相違している、その一斑が、刻明に浮き彫りされていることがうかゞわれよう。

5

このように日本國の困難、国民の苦難に際しては、天皇みずから謬ラス之ヲ中外ニ施シテ恃ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服ヨウシテ咸其徳ヲ一ニセン事ヲ庶幾フ

と結ばれているように、歴代天皇の詔勅の殆どは、等しく皇祖・皇宗の祖靈にぬかずきつゝ、その遺訓を体し、その道を守り、国民と共に徳を同じくしよう、と願われて来ている。

キリスト教徒であつたマツカーサーとしては、想像すら出来なかつたのも、無理からぬことである

ト深厚ナリ
「斯ノ道ハ实ニ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ

トいう敬神崇祖よりこと起り、

「斯ノ道ハ实ニ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ恃ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服ヨウシテ咸其徳ヲ一ニセン事ヲ庶

ここに世界に比類なき日本天皇

との因縁について、次のように示

している。

道がある。この天皇道のあるところ、日本国体の精華がある。

天皇道——それは天・地・人をつらぬく真理の施政であり、称して王道という。

大聖人は、かかる日本国体の真髓を徹見しておられたればこそ、

「孝子、慈父が王敵となれば、父を捨てゝ王に参る。孝の至り也」と仰せられている。

蓋し、孝養に対して身みずから

嚴正であられた大聖人が、かくの如く仰せられたお言葉の中には、大聖人の日本国体觀が結論としてうかゞわれよう。

また大聖人は、法華經と日本国

されている。

「本有の靈山とは、この娑婆世界なり。中にも日本國なり。法華經の本國土妙とは娑婆世界なり。本門寿量品の未曾有の大曼ダ羅建立の所在なり」

仏教は天竺のインドに起り、仏法東漸の予言のましく東へくと伝わり、ヒマラヤを越え、砂漠を渡り、漢土の中國大陸を経て、日本國へ渡つて來た。

6

仏陀は三宝の恩・親の恩・師の恩・國土の恩という「四恩」を教えられている。

時は末法、処は日本國、こゝに仏教の精華たる法華經の花が開き日は東より出て、世界の闇を照すが如く、まさに日本國を本として全世界に正法が宣布されようとしているという事実を忘れ、國民

ぜられたもの、決して故なしではない。且つ、大曼ダ羅の内に天照大神・八幡大菩薩の國神を勧請されたのも、重大な意義をもつてゐるといえよう。

の一人として、天皇の慈愛によつて生かされているという事実を忘

れ、更に人間の一人として、仏の慈悲によつて生かされているといふ事実を忘れがちである。

我々は日夜、このことを深く反省しなければならない。そしてそこから四恩に報ゆる報恩感謝の念の心底より湧き起り、大音声にお題目を唱念する時、そこに本国土妙があり、「我此土安穩天人常充満」の淨仏国土が現前している。

△了△

鷲峰行学研修会案内

恒例の春季鷲峰行学研修会は、身延町波木井山頂の醒悟園本妙庵において左記の通り開催されることになりました。あるつて御参加下さい。

期間 三月廿二日（火）より廿五日まで四泊四日間
講題 「日蓮聖人の本尊觀」（特に本仏論）「日蓮聖人の國家觀」「日蓮聖人の唱題実践道」（毎夜座談会あり）講師 日高白象師
定員 十名、参加自由、会費不要

申込 醒悟園本妙庵

なお期間中の一日は身延山の近くの内船の思親山腹、倉ノ平の滝山（日誦上人の滝）で修行しますので水着持参のこと。

本妙庵の道順は、身延駅よりハイヤーで波木井の日新製材の横の遠藤喜男宅で下車。この家に荷物をあずけて八丁の山を登ること。

天皇・皇后両陛下を

我が職場にお迎えした日に

何時かは必ず法華經を進講し奉らんと期しつゝ



醒悟園本妙庵で丸々發育した
未来の本化僧——花房健客チヤン

花房

毅

1

昭和四十年十月二十四日、この
日午後二時五十二分定時、昭和四十
年度の岐阜国体開会式に御臨席
された天皇・皇后両陛下が、その
帰途、僕の勤務している岐阜市の
後藤瞬卯場の諸施設を天賜、御視

察されるため、御料車に召されて
御来場された。

天皇・皇后両陛下の御視察をた

まわるほどの孵卵場——まずこの
会社の内容から説明しておこう。

当社（後藤孵卵場）は、日本養
鶏産業の自立性を守るために、昭和
三十五年以来、四億数千万円の巨
費を投じて研究機関の充実と、研

究陣容の強化を計り、四人の博士
と四十余名の研究員の、寝食を忘
れての活動に加えて、重役を陣頭
とした育種グループ組織活動によ
り、年々飛躍的改良を進め、卵用
種ゴトウ二〇〇、肉用種ゴトウ四
〇〇・P、ゴトウ五〇〇・Pの作出に
成功、爾来、外国一流ヒナと堂々

互格以上に戦っている日本No.一
の孵卵場である。

当社は資本金五〇〇〇万円、三
六〇余名の従業員。年間生産羽数
二七〇〇万羽。三つの研究試験場
それらの能力のすべてをあげて、
日本養鶏産業殖民地化の防波堤を
らんとしている企業であるが、國
内における最も低開発にして脆弱

な農業経済にとって、養鶏産業こ
そ重要な比重を示している、と僕
は考えていた。

それだけに養鶏産業には、国際
的競争が口ましに激化しており、
さて、両陛下は、少憩の後、場
内をご観察され、ヒナの発生、品
種の改良、飼料、飼育管理、病理
鑑別、発送、荷づくり、食品加工
なされ、最後、IBM室への巡回
よい、意義ある出来事だった。

当社の後藤社長自身としても、
戦前より戦後の今日なお長い間、
新興宗教「成長の家」の教えによ
り天皇を現人神（あらひとがみ）
とたゞえ、全社員に対しても毎日
官城源氏を欠かさせたこともない
ほどであるが、それだけに感激さ
れみなき一日であったようだ。

ここは僕の所属する職場である

僕は、IBM室担当者として、両
陸上に説明申し上げる時間を、わ
ずかであるが五分間あたえられ、
一週間前よりその資料作製を云い
渡されていた。

深々と合掌（特に合掌）の姿勢
より頭を上げた僕は、五十センチ
のところに両陛下を拝した。素晴
しい気品と、申し難い児事な貢録
であつた…………。僕はおよそ
次のように御説明申し上げた。

「……当社の中央研究所をはじめ
め三つの研究試験場、及び蓄養研
究グループの、三十万羽の種鶏の
うち、繁殖対象となつてある七万
羽の鶏につきましての経済諸形質
資料は、すべて当IBM機械組織
によつて迅速、且つ正確に処理さ
れ、時代に適応した鶏の改良計画
の、実施を助けるわけでございま
す。

例えば、この資料は、一羽の雄
より繁殖するすべての個体の、經
済諸形質一覧表でございますが、

○1という父には、○1より○7
という七羽の母があり、○1×○
1の間には、○A1—1352とし
○A1—131360までの八羽
の個体があります。同じように○
1という父家系には、異母兄弟を
含め計六十二羽の子が生れたこと
になります。

さらに、この○1父家系の、六
十二羽の個体のうち、ただ一羽で
も遺伝性症候が発生致しますと、
この父家系すべてを捨て、繁殖鶏
のうちより伝染病遺伝子を持つも

すべての経済諸形質を測定し、短
期（一五〇日令）長期（二二〇日
令）二度に渡る検定の、その総合
成績を、ある高等数学の公式にあ
つてはめ、算出したのが選抜指數
という、この得点でござります。
このうち、兄弟のどれか一羽が
高得点を得ても、一羽悪いものが
あれば、その家系は繁殖鶏の対象
にはなり得ません。陛下もよく御
存知の、集團遺伝学によるもので
ござります。

のが出ぬよう、万全を期しており
ます………」

でいた…………。

天皇陛下は、身を乗り出して資

料をご覽になり、陛下の口ぐせで

ある「あーそう」「あーそう」を
連発されておられた。

皇后陛下は終始ニコ／＼ほゝえ
みながら、室内の社員に会釈され
ておられた。

そのような西陛下に対して、僕
は精魂込めて御説明申し上げなが
ら、実は腹の中で、全く別の事を
思ふ続けていたのだ。

そして、わずか五分間という、

僕の生涯に二度と訪ずれぬであろ
う、この貴重な時間に、伏して申

し述べたいことを、腹の中で叫ん

3

僕には、宿命を背負つて産れて
きたかの如き一人息子が居る。あ
れから七ヶ月……。

昭和四十年四月四日、僕に七ヶ
月半の未熟児が生れた。弱々しく
青白い男の子であつた。驚天倒地

の極み……。さつそく身延の口
高上人にお願いして健容(たけひ
ろ)と名前をつけて頂いたが、僕
をおそつたのは、

——健容が死ぬ——
という恐怖であつた。

思えば、かつて僕は、中絶とい
う縁の自らの意志によつて、胎児

を闇から闇へはうむり去つた恐
べき経験があつた。

如何なる因縁があつてか、受け
難き人界に生を受けるとしていた
がら、親の手によつて日の日も見
ざに抹殺されていつた胎児の苦痛
苦悩……。それを生れ出た健容
の上に感じ、僕は愕然としたので
ある。

——親の罪によつて、今度は健容
が死んでゆく——

僕には、もはや仏天への懺悔あ
るのみだつた。

——僕の命とひきかえに、我が子
健容を生かして下さい——

と祈るよりほか何ものなかつた
のである。親の手で生命を断つた

胎児に懲悔し、あの子の回向も供養もしていなかつたことに気つき懲悔のしようもないほどだつた

——一体どうすればよいのか

僕は、このことを口高上人に訴えた。折り返し次のような指示があつた。

「亡くなつた水子の靈に対し、

一家をあげてお題口を写経しては懲悔の施餓鬼供養をせよ。そして健容の上に健康を祈れ。但し、健

原田敬二君というその青年は、新興宗教「成長の家」の青年会員で、社内でも人気のあるスポーツマンであつた。

奇病はガンの一種という診断で水子も健容も、平等であることを忘れてはならない

僕も母も弟も妹も、そして一家をあげて水子の供養と、健容の健康を祈りつづけて行つた。それは

来る日も来る日も、真剣な祈りの連続だつた。

4

当時、会社の同僚が、生きながら腸のくさつてゆくという、奇病にたおれていた。

原田敬二君といふ青年は、

新興宗教「成長の家」の青年会員で、社内でも人気のあるスポーツマンであつた。

然し彼は死んだ。紫色に全身ふくれ上り、苦しみ、もがきつゝ死んでいったのだ……。

その前夜、僕は自己懲悔と健容に対する祈願と、原田敬二君の病気平癒を祈るため、終業後、ウチワ太鼓を片手に、岐阜の街へ飛び出していた。

たずね歩いた岐阜市内の二・三の日蓮宗門寺院で、唱題祈念するの面会時間を待ち受けた「成長の家」の信徒と、その経文「甘露の法雨」を誦詠する声の洪水で一杯であつた。

しかし、何たることか、訪ねた宗門寺院では、すべて玄関払いを食わされた。

「そんな恐ろしいお祈りをする、しかも檀家でもない見知らぬ人に本堂はお貸し出来ません。しかも

こんな夜遅く、近所迷惑です」

——そなこれが日蓮宗の姿なのか――

歩き歩いて真夜中、長良川（ながらがわ）の河原に坐り込み、一

夜徹宵して太鼓を打つた。何度も

何度も己の罪の深さに、身をふる

わせたものだつた。翌日、原田君

は死んだ。その夜、再び同じ場所

へ来て一夜を明かした。

然し、昼間見た「成長の家」の

姿……

「病氣に犯されて死ぬような者は信徒の風上にも置けぬ奴……」

と罵つていた彼等の態度は、まるでバダカの狂団であつた。

——俺は、何という情けねエ野郎

だ。原田君に……あんなに苦しんで死んでいつた人に、遂にお題目の尊さも、久遠の本仏も知らせることがなく終つてしまつた――

……「成長の家」にこりかたまつた後藤勝卯場を、全社あげて法

華一乗に昇華せしめるのだ、と秘

かに心に期しながら、死にゆく、

たつた一人の同僚にすら伝えるこ

との出来ないお題目を、一体どうすれば弘めることが出来るのだ！

5

最大の布教、それは巧みな弁説よりも、深い教理よりも、お題目を先ず自ら真剣に唱えるということがあり、それによつて人をも唱えせしめることが出来るのは……と言われた日高上人の、日頃の教えはどうしたのだ――

自問自答の末、僕はただ憮悵としてひれふすばかりであつた。

その後、健谷は、身延の醒悟園本妙庵に於て、日高上人の保護を受け、驚峰会の学生に見護られながら、見違えるような素晴らしい豪傑に成長していく。

身長も体重も標準以上になつて

のずから伝つてゆくものだ。

いつた。事もあろうに、仏像を思
わせるような顔もしていた。泣い

ている時も、日高上人の説経唱題
の声にニコ／＼するといふ。

矢張り生ながらに、仏門に入る
因縁をもつていたかも知れない。

僕には、我が子健容に対し、か
つて長良川の河原に於て、仏天に
立てた誓願があつた。

「この子が無事成長したあつか
には、この子を必ず仏天に挙げ、
出家せします。どうぞ僕の命と
ひきがえに、この子を救つて下さ
い」

僕自身、健容の頭をなでながら
云う言葉は、

「おい豪傑よ、日蓮大聖人の二陣

三陣となつてくれ。俺は生涯、在
家の身として正法宣布の法鼓を擊
つ。

お前は一介の野僧として、世界
を歩け。そしてやがては、天皇陛
下に法華經をお説き申せ。

おい豪傑よ、それが俺とお前の

今生の仕事なのだ」

日蓮門下七百年の志は、立正安

國、國家諫曉、天皇諫言といふこ

とに指向されている。

今を去る天平の昔、聖武天皇は
近江の甲賀寺に大日如来の大仏を
建立せんとするに当たり、

「朕、薄德を以つて、恭しく大位

を承け、志兼濟に存し、勤めて人

物を撫す。率土の涙、己は仁恕に

うるおうと雖も而も普天の下未だ

の在るべき在りように対し、天皇

法恩治からず。三宝の威靈を頼み

て、乾坤あい奉（ゆたか）に、万

及び皇太子がみずから、その道標

となり、如何に国土は狭く、国力

は微弱であつても、聖天子転輪聖
王の実を現わすことが出来る。

天皇制は、曾つての酋長時代の

残骸であつてはならない。あくま

でも国家、世界を対告して、人間

の在り方を示す象徴でなければな

らない。

代の福業を修めて、勤植ことより
云う言葉は、

「おい豪傑よ、日蓮大聖人の二陣

く榮えしめんと欲す……」

ただ我れ一人のみ

と勅し、更に東大寺の大仏の前

能く救護をなす

にぬかずきては、みずから、

といふ本仏教尊の大慈悲門を、

「三宝の奴（やつこ）として仕え

あまねく全世界に向つて開かねば

奉る」

ならない。

と勅されている。

蓋し今は、像法の世の真言大日

I B M 室を出てゆかれる天皇・

時代ではない。末法法華一乗の時である。真言の大日に代つて、廣供養舍利の靈文通り、天皇みづから仏舍利の大宝塔を建立供養し

6

皇后両陛下に対し、深々と合掌礼拝しながら、僕はニヤリとしていた。

今この三界は

「天皇さま。どうぞいつくまで

皆これ吾が有なり

も長生きして、御壯健でいて下さ

その中の衆生は

いませ。いつの日か、必ず必ず、

悉くこれ吾が子なり

我が子健客が、御皇室に素晴らしい

しかも今この処は

ものを持つて、参上つかまつりま

もろ／＼の患難多し

す……」

お題目と末代の幼稚

天晴れぬれば地明かなり

法華を識る者は世法を得べきか

一念三千を識らざる者には

仏、大慈悲を起して

五字の内に此の珠をつゝみ

末代幼稚の頃に懸けさしめ給う

四大菩薩

この人を守護し給わんこと

大公周公の成王を撫扶し

四皓が惠帝に侍奉せしに

異らざるものなり

△觀心本尊鈔△

立正安國と王仏冥合へその二▽

日 高 白 象



4

日蓮大聖人の、その生涯の根幹

であつた立正安國ということは、
念仏門における「王法為本」の如

く、

先とすべし

といつたように、仏法と王法と
を隔別し、しかも世上においては

王法を本とし、仁義を先とす
べし

といつたような類のものでもな

く、また仏法と王法とが両者冥合
するといつても、

仏法・王法は一雙の法なり。

殊に、外には王法をもて表と
し、内心には他力の信心を深
くたくわえて、世間の仁義を

鳥の二つの翼の如し。車の二
つの輪の如し。一つも欠けて
は不可なり。

かるが故に、仏法をもて王法
をまもり、王法をもて仏法を
あがむ

といつたように、同一次元上に
おける同一比重のものでもなく、
かといつて立正安國論の中に、

所詮、天下泰平・國土安穏は君臣のねがう所、士民の思う所なり。

それ国は法によつて昌え、法は人によつて貴し。國にび、人滅せば、仏を誰があがむべき、法を誰か信すべきや。ます國家を折りて、須らく仏法を立つべし。

といつたような國主法従の立場にあつたものでもありません。

「まず國家を折りて、須らく仏法を立つべし」

といふことが、眞理であるとす

るならば、一切の宗教は國家繁栄

のための御用宗教という存在となり、國家政策の変更されるたびに

宗教の内容も変質をよぎなくされ
るばかりでなく、國と國との争い

は、そのまま宗教と宗教の争いと化し、たとい法華經が一切の宗教の中でも、最も勝れた宗教であつたとしても、所詮、國家政策上の手段にすぎないものとなつてしまいましよう。

立正安國論の中の右の言葉は、

日蓮門下の人々によつて、わけても明治以降、殊に戰時中にあつては随分盛んに用いられ、確かに大聖人の言葉を代表するといつてよいほど、有名な言葉として伝えられて来ました。

ての烙印をおされてしまつたので
す。

これは誠に遺憾なことです。
思えばこれは、大聖人一代の根幹とされた立正安國論の中の言葉なのですから、如何にも大聖人みずから御指南された、至上の金句の如く、受け取られ勝ちなことではあります。

然し、よくこの文章の前後を考えあわせてみれば、もと立正安國論は主客問答式論述であり、その中につて此の言葉は、義政者に相当する客人が、

それ国は法によつて昌え、法は人によつて貴し……
ます国家を折りて、須らく仏

とを立つべし

して いたの でした。

んば、身はこれ安全、心これ

と、みずから抱いていた日頃の

要するに当時の宗教は、幕府を

禪定ならん。

抱負を述べることによつて、天下
泰平・国土安穏の道を、主人であ

中心とする国家政策の一環の中に
あつたのです。そして、そういう

と、法主国徒の立場を明かにさ
れて いるのです。

る日蓮大聖人にたずねることにな
つて いるのですから、もとより大

聖人の言葉ではなく、むしろ為政
者 が、日頃より抱いていた宗教上

こうに安國論の骨目があるので
すが、日蓮門下の人々の中には、

の 政治的思索にすぎないもの、と
申せましょ う。

むべなるかな、当時の鎌倉執權
は、武力で勝ち取つた幕府政治を
安泰ならしむべく、あらゆる新政
策を施す一方、中國より盛んに帰

され、軍国主義・國家主義のお先
達え、軍国主義・國家主義のお先
き棒をかついでしまつたのでした

汝、早く信仰の寸心を改めて
速かに実乗の一善に帰せよ。

「ところで法主国徒とは、一体ど
ういうことか」

化僧を招聘しては建長寺、円覚寺
等々を建立し、京都文化に対抗す

なり、仏国それ衰えんや。十
方は悉く宝土なり、宝土何ぞ
やぶれんや。

5

る鎌倉文化を築き上げようと努力
する

國に衰微なく、土に破壊なく

といふと、このことについて大

聖人みずから、次のような解りやすい譬えをもつて説明されていましたので、それを紹介してみましょ

う。

△その一△

仏法は躰なり

世間は影なり

躰まがれば影なきめなり

△その二△

天晴れぬれば

地明かなり

法華を識（し）る者は

世法を得べきか

まことに仏法と王法とは、体と

影、天と地の関係にあると申せま

しよう。

まがつた影を真直ぐにしようと

しても、体がまがつている限り出

来ない相談です。影を真直ぐにし

たいならば、まず体を真直ぐにす

ることです。

それと同様に、世間を正しくし

ようとするならば、まず仏法を正さねばなりません。

これを天地の譬えでいうならば天が暗ければ地も暗く、天が晴るれば地もまた明かになつて来るものであつて、天の暗きまゝに、如

何に地ばかりを明かにしようとしても、なるほど月や星の光り、或は人間が発明した電気の光りもありますようが、太陽の光りには及ぶべくもなく、太陽の光りを仰がない限り、地の暗さは如何ともな

し難いでありますよう。

そこで地を明かにしようとするならば、まず明を明かにしなければなりません。地明は天晴の功德によるものです。

これと同様に、世間も仏法によつて明くなつて来るものであり、

国家には國法、或は王法といふ勝れたものがあるとしても、その悉くは仏法によつて照されねばならないものです。

大聖人が主張された立正安國というのも、要するに正法の立つところ、その功德によつて國家が安泰となるということであつて、安國とは立正の功德によるものである、ということを忘れてはならな

いとります。

十方仏土の中には

然るに、

たゞ一乘の法のみありて

「天地合一」

二もなく、また三もなし

「王仏冥合」

というが如く、三世十方に亘つ

ということを主張し、これによ

て、万法を開会統一する一仏乗な

つてはじめて立正安國の世界が実

現するなどと考えることは、正法

いうなれば、王法に片棒をかつ

の力の如何に偉大なものであるか

いでもらわなければ、人も困も教

といふことを、知らざるも甚しい

えないような仏法ではないのです

妄想と申せましょう。

世間には、前述のように、

「仏法と王法とは、あたかも鳥の

両翼、車の両輪」

という説も往々にしてあるよう

ですが、法華經は鳥の一方の翼で

もなければ、車の一方の輪でもな

く、

6

とかく世の中では、王法といえ

ば政治勢力、仏法といえ宗派・

教団の勢力、というように早合点

しがちなものです。天人との三

体をつらぬいた真理にもとづくと

いう王法にしても、必ずしも現実

の政治に行われてゐるとは限りません。むしろ現実の政治は、真理にそむいた、みにくいものが少くはないのです。

それと同様に、仏陀の教えられた仏法そのものが、そのまま現実の教団に実施されているとは限りません。むしろ現実の教団の中に

は仏陀にそむいた、みにくいものが、神秘のウェーブにかくれて累積されてゐるほどです。

そこで「政治と宗教の冥合」といえば、一往は如何にも尊いもの

かのように思われもしめしょうが

然し、ともすれば政治勢力と宗教

々団の勢力との結托、となりかねないものであり、若しそうなれば

これほど恐しいものゝないことは
古今東西の歴史に深くなど物語
られている通りです。
ところで理の範疇において、天
地の真理にもとづく王法と、仏陀
の教えのまゝの仏法とが冥合すれ
ば結構なことだ、という意見も起
りましようが、この冥合の仕方に
おいて大聖人は、明かに法主国從
の立場をとられたのでした。

大聖人が凶讃された大マンダラ
を御覧なさい。この大マンダラの
内には、天照大神・八幡大菩薩と
いう日本の國神も勧請され、更に
は仏法によつて天下を統一すると
いう転輪聖王までも勧請されてい
ます。

然し國神にしても転輪聖王にし
ても、本仏果海中に入つて、本仏
を受持するという功德によつて、
その本来の姿が顕揚されるのです

このことは曾つて戰時中、軍部
より糾弾され、不敬罪にまで問わ
れんとしたことすらあつたほどで
した。然し戦後、創価学会の跋こ
に手をやいた伊勢の皇太神宮が、
その対策として身延山頭布教隊
を招聘し、内宮でも外宮でもお題
の法鼓がなり響いたということ
は、一体如何なる天意によるもの
なのでしょうか。

へつゞく▽

節分について

節分とは季節の分れ目の意
で、立春の前日のこと。我が
國では立春を元日とする風習
が残つてゐる。

節分の代表的行事は「鬼や
らい」「豆まき」であるが、
鬼やらいは宮中の追儺（つい
な）式をまねたもの、豆まき
は室町時代に中國の風俗をと
りいれたものといわれてゐる
めでたい行事ではあるが、
信仰心もない芸能人や有名人
が、節分会を賑わすというこ
とは、法華經の道場では如何
なものであろうか。

ある日の仏陀へその一▽

琴の糸にたとえて

沢田覚象

人類の歴史が始まつてこのか
た、一ぱん偉大な人間は、一体誰
れがあつたでしようか――

それは、インドに出現された仏
陀です。すでに三千年の歳月を過
ぎた今日もなお、仏陀の教えは、
幾億の人々の上に、これまでそ
うであつたように、今後も、大き
な慈みがほどこされて行くことと
しよう。

王舎城の鷲峰山（靈鷲山）におら
れた時のことでした。

あたりの林の中で、最も真剣な
修行を続けていたソーナという仏
弟子がいました。ソーナは心に迷
いを生じ、その迷いと戦いつづけ
ていました。

△然し、それにもかゝわらず、わ
たしは一向に、解脱（げだつ）す
ることが出来ない▽

△このようなことでは、わたしは
むしろ、通俗した方がよいのでは
なかろうか▽

△わたしの家には、幸い財産があ
る。その財産によつて、何不自由
のない、幸福な生活を送ることが
出来る。いつぞ、その方が、主も
であるまいか▽

ある日、仏陀がマカダの国の都

★

ゆまい行をつゝけている▽

ソーナの悩み――それは余りに



醒悟園本妙庵の本尊
——金銅の釈迦像——

が、巧みであつたと聞いているが
く察知された仏陀は、さつそくか
解脱への道を闇してしまつていた
のです。ソーナは、このことに気
づかず、迷いに迷いががさなつて
いまや、

——この道の沙門たることを断念
して、俗世にもどる方が、ましで
あるう——

も刻苦にすぎた精進が、かえつて
解脱への道を闇してしまつていた
のです。ソーナは、このことに気
づかず、迷いに迷いががさなつて
いまや、

く察知された仏陀は、さつそくか
の林の中に、彼をたずねられまし
た。そして、その心境をたゞされ
ました。

ソーナは、あるがまゝに悩みを
打ち明けました。この時、仏陀が
ほゝえみをたゞえながら静かに語
りかけられたお言葉は、

「ソーナよ、なんじが曾つて家に
ありし頃、大へん琴を弾すること
ていたならば、なんじの琴は、よ
い音を発するであろうか」

「それでソーナよ、なんじはよ
く存知ているであろう。なんじの
琴の糸が、あまりに強く、張られ
ていただならば、なんじの琴は、よ
い音を発するであろうか」

むろんソーナは「否」と答えま
した。

「ではソーナよ、なんじの琴の糸
が、あまりに弱く張られていたな
らば、どうであろうか。かなでて

よい音を発することが出来るであ

るうか」
その答えもまた「いゝえ」であ
りました。

「ソーナよ、では、その琴の糸が
あまり強くなく、ゆるくもなく、
程よく張られていたならば、いか
とであろうか。なんじ、これをか
なで、よい音を発することを得
るであろう」

ソーナは、「はい、まさにそのとおりです」

と答へました。

時に仏陀は、その結論を、つぎ
のように説き教えられました。

「ソーナよ、まさにそれと同じで
ある、と承知するがよい。刻苦精

進にすぎれば、心がたかぶつて安
らかならず。精進が緩（かん）に
すぎれば、懈怠（けたい）にかた

むく。

その故にソーナよ、なんじは平
等の精進に住し、また諸根の平等
を守り、かの中における眞実の相
をとるがよい」

ソーナはこの教えによつて、こ
れまでの極端な修行をやめ、やが
て究極の目的である悟りを開くこ
とが出来たということです。

★

せん。

人間最高の生き方を、身を以つ

て示された仏陀の、限りなき大慈
悲を感じ、恋慕・渴仰の心を持つ
のであつて、理論的に言えば、

「有無の二刃」「断常の二見」を

はなれ、「苦樂の二種」に偏しな

いことを、教えられたものです。

思うに、この琴の糸のたとえは
私達の信仰上についても同様に言
えることではないでしょうか。

いくら厳しい修行をしてみても
それが正しい教えにもとづいてい
なければ、修行のための修行に終
つてしまひます。かと言つて、い

くらすばらしい理論を述べてみて
も、それだけでは信仰とは言えま
せん。

創価学会の自己批判と

身延山の体制

鷺峰諸賢の一層の奮起を乞う

豊橋市阿野貞重

1

昨年の暮れも迫つた或る日のこ

と、私は、私の先輩で保守党の市

会議員であるA氏を訪ね、年末

の挨拶をしながら、種々話題を交

わしていましたところ、日頃より

私自身の頭の中に創価学会のこと

がありましたので、何時しか話題

か？

も学会のことに及んでいました。

次に、その時の対話の結論を掲げ
れば、

私は市政の面でも、当市には創価

学会の公明党議員が三名もあり

なお今後の増加も予測される今

日、保守党の人々は、この状勢

を、どのように考えておられる

か？

ていた。

A それについては、去る県議

員選挙の折、公明党の連中は保
守党的B氏を落選させようとし
て、あらゆる策略を用いて対抗

したことがあった。

然し結果においては、B氏は

当選し、大きわざをした公明党

側が、却つて予想以上に惨敗し



それまでは公明党議員も、市

議会においては、まことに活発

な意見も発表し、すこぶる志氣

旺盛ではあつたが、県議選を契

機として、全く事態は一変し、

爾来、一言の発言もなく、昔日

の感、全く無いといつた具合で

ある。

これを国家全体の立場から見
てみると、次に来るべき衆議院

選挙に、彼等が勝つか負けるか

は、今度の県議選より推量して

も明白なことであり、その辺か

ら創価学会も公明党も、もはや

下り坂になると断言出来よう。

私は日頃から、創価学会も公明

党も、自らの誇法の罪によつて、
必ず天譴（てんけん）をうけるも

のと思つておりましたが、今その
天譴のことは免も角として、人為
的立場からみましても、学会の興
隆、公明党の進出といふものは、

次の衆議院選挙で峠を越し、その
後は、全学会員自身の自己批判と
外部よりの批判とが相乘され、そ
れが推力となつて下降線を書き出
し、更にその下降線は、日時と共に

に加速度的な急カーブをたどるも

の、と予想いたしておりましたと

ころ、はからずも前述の通り、A

先輩の予想と全く符合いたし、一

等が、自己批判を重ねに重ねて、

驚いたしたことありました。

ことです。

さて驚峰会諸賢、若し私の愚考
が事実となつて来た時のこと、よくよく
思想とめぐらして頂きたい
と思います。

もとより学会員の中に多く見ら
れる真剣な求道と弘法の精神
(その眞偽、正邪は別として)た
ゞひたすら、

「御法のため」

と称して突き進む姿には、時に
は敬意すら感ぜさせられるものが
あつたほどですが、そのような彼
等が、自己批判を重ねに重ねて、
いよいよ学会自体を見限つた時の

彼等が、進むべき新しい依りどころとして、一番最初に眼をつけたところは、奈邊にあるでしようか。

私は言わしむれば、それは日蓮大聖人の御真骨の鎮まります日蓮宗總本山身延山久遠寺のはかはないと思います。

彼等は昨日まで、私たちと同じ五字七字のお題目を、一所懸命に唱えて来ました。しかもその上で身延山を「邪宗の本家」との如き、うそぶいていた人々です。

然しそれは、彼等が自分で覚つたものでなく、上層部より印刷物や法座・講演等で押しつけられたものにすぎませんでした。

だからこそ、ひとたび自己批判

に入るや、これまで学会員として一所懸命にやつて来ただけに、その自己批判も、より一層の真剣味

を加え、特に身延山を強く罵つていた如きに、真実の身延山をふりかえり、まことの法華經の色読を

求めて、何處よりも先ず、身延の祖廟に懺悔すべく、身延へ身延へと登詣して來ることであります。

この時をゆるがせにするか否かは、百年の悔いを後世に残すか、戒壇建立の曙光を見出すことが出来るか、と申し上げても敢て過言ではありません。

更に、そう思えばこそ、私の憂うところは、この大切な時にいて、果して彼等に対して、身延山側に、受け入れ態勢が有りや否やということであり、受け入れる身延山側自身の姿勢が、完璧なりや

だからこそ、ひとたび自己批判に入るや、これまで学会員として一所懸命にやつて来ただけに、そのらんとする大切な時なのです。

広宣流布を願う人々は、真剣にこの時を重視して考えなければな

りません。

否や、ということです。

身延全山が、物心ともに大聖人のおほしめしにかなうものでありや否や……

何一つ取り上げてみましても、そのものが、大聖人の血脉に躍動している身延山でなければならぬ、と日夜、切に思い、切に願わすにはおれないものです。

これまで両度に亘つて、以上の愚見を呈して来ましたが、重ねて参考の提唱いたします。

なにとぞ好機を逸することなく

日蓮大聖人の御聖旨に添い奉るべく、お取り計らいたまわらんことを、切に御願い申上げます。

昭和四十年一月二十三日 記

これに対する

鷲峰会の見解

「宗門諫言」と申しましようか御提唱の切々たる御真情には、全く感銘を深くさせられます。

殊に阿野様は在家であられながら、大切な御子息を二人とも身延山高校へ入れ、そして卒業せしめられているほどの大信家であられますだけに、身延のことにも精通しておられ、要宗護山の念も、ひ

然し、学会の上層部においてはとしおのことがありましよう。既に、このことを充分に予測し、申すまでもなく、戦後抬頭して来た幾多の新興宗教も、統々身延に帰一しており、創価学会の会員も、後を断つ暇もないほど、日蓮獲得した勢いについて、次の衆議

宗に帰伏して来ています。

富士の大石寺を總本山とした日蓮正宗寺院の内にも、既に学会を批判・糾弾して離脱、転宗する寺院が、全国各地に続出しています

こうした動勢の中にあつて、来るべき衆議院選挙において、学会が大敗したならば、学会各員の内部における自己批判は、一層拍車をかけることは火を見るばり明かますだけに、身延のことにも精通なことあります。

既に、このことを充分に予測し、申すまでもなく、戦後抬頭して

院選舉には、乾坤一擲の舉に出る
ことでしょう。

その結果、学会が慘敗したならば、内部の大動搖はいまでなく、前進の足は鈍り、むしろ後退は時と共に加速度を増して、転宗帰伏する者も、増加の一途をたどつて行くことでしょう。

然し、富士日興上人以来六百年に亘る源頤思想は根深いものであるだけに、一時の衰退・一部の分立・離脱ということが起つたとしても、学会の大勢が、一舉に身延へ向うということは、決して断言出来ないと思ひます。

若し仮りに、そういう事態となつた時は、独り身延一山の問題の

みならず、日蓮宗全宗門をあげて受入れ体制を講ずべきであり、それよりも先きに講ずべきことは、衆議院戦における学会の進出を、完敗せしめるほどの布教戦線を、華宗一致して全国的に、今から展開しておかねばならない、ということです。

要は、学会内部より自ら起つて来るだらう自己批判を待つより、積極的に学会全体の自己批判を誘起・激震せしめるということにあり、もとよりその好機は、仰せの通り衆議院戦に迫つてゐることは申すまでもありません。さゝながら驚峰会の運動もこのことに指向してゐます。なにとぞ一層の御支援をお願い申し上げます。

学会折伏の第一線は街頭布教であり、この布教の先陣を切つたのは、外ならぬ身延山です。そして身延山街頭布教は、今や宗門街頭進出の根幹ともなつて來ていますそこで身延山の街頭布教を、全國津々浦々に、しかも波状的に、綿密な組織と計画にもとづいて、一層激烈に展開する体制を整える

釈尊の入滅と

日蓮聖人の生誕

大聖人は像法の人か

立正大学三年 和田龍昌

二月の行事といえば、お釈迦さ
まが御入滅された荼槃会（ねはん
え）と、日蓮大聖人がお生れにな
られた降誕会、という二つの仏事
があります。

日の夜半のことでした。時に（仏
滅年代考を宇井伯寿博士の説によ
れば）西暦紀元前三八六年、今よ
り二三五二年前のことです。

人類の親と仰がれた大聖釈迦牟
尼世尊が、西北インドのクシナガ
ラという寒村の、村はそれにある
沙羅樹の林の中において御入滅さ
れたのは、御年八十才の二月十五

何かしら神秘的な符合を感じられ
る方もおられることでしよう。

然し問題は、そうした日時の符
合よりも、大聖人の生誕の年代が
果して末法時代なのか、像法時代
なのか、ということにあります。

大聖人のお生れになられた年代
は、承久四年（この年四月十三日
貞応と改元）西暦一二二二年のこ
とですから、仏滅年代を西暦三八
六年とすれば、大聖人の出生は仏
滅後一六〇八年ということになり
これを正法千年、像法千年、末法
万年という仏教の正像末史觀にあ
てはめれば、大聖人は末法の人で
なく、像法の人ということにな
つてしまします。

たとえ宇井伯寿博士の説によら
なくとも、今日の仏教学界では、

仏滅年代を西暦紀元前三百年から
どんなにさかのぼつても五百年ま

での間、というように定説されて

いますので、大聖人は矢張り像法
時代の人というほかはありません

然し、これでは「末法有縁の唱
導師」という大聖人の使命も、忍
難弘教の意義も吹つ飛んでしまう

恐れがります。そこで、こうい

う仏教学上の学説に対抗すべく、
正像末史觀の中の正法千年とい
うのを正法五百年として、敢て大聖
人を末法の始めの人とみなすと
する学説が起つたり、或は道元禪
師のように、正像末史觀そのもの

を、真向に否定し無視してかゝる
学説も起つて来てはいます。

然し、正像末史觀の中で最も大
切なことは、表面的な年代数より
も、要はその内容にあるのですか

ら、たとえ大聖人が像法時代の年
代の人であつたとしても、既に時
代相が末法の相様を呈していたと
みる時、この問題はおのずから水
解されることでしよう。

事実、大聖人の時代には、仏滅
後の仏教が、悉く枝葉末節に走り
形式に流れ、「教」はあつても、
「行」「証」もない時代となり、
仏法まさに断絶せんとして、しか
も世界中は蒙古の大軍によつて蹂
躪され、白法隠没、斗争堅固とい
あります。

△△△

う、末法の様相を露出してはいたの
でした。それであればこそ大聖人
が、釈尊の仏勅をこうむつて、法
華經の大本を開顯し、立正安國の
大運動を展開されたのです。

(この故に、大聖人を末法唱導師
として仰ぐに、何らさしつかえは
ないと思われますが、なお正像末
史觀の年代数にとらわれる方があ
られるならば、現代こそ仏滅後、

既に正像二千年を過ぎた末法の始
めの時代に相当していることにな
るのでですから、こゝに仏教学をも
開会した法華經の真美と、その弘
通の使命を改めて感じ、大聖人の

二陣三陣として更に奮起すべきで
あります。

唱題の心のおきどころ

解説 日 高 白 象

おたずね

お題目を唱える時、私たちの心

は何処におけばよいのでしようか

「仏性開顕」というからには、私

たちの本具の仏性を開顕するとい

うこと、心をおくのでしようか

または「罪障消滅」というから

には、私たちの無始の罪障を消滅

するということに、心をおくので

しようか。

或は「祈願成就」というからに
は、諸天善神の神通力によつて、
御利益をうけるということに、心
をおくのでしようか。

或はまた「世界平和」というか
らには、世界の平和を実現すると

いうことに心をおくのでしようか
右、おたずねいたします。

おこたえ

日蓮大聖人は觀心本尊釈の中で

釈尊の因行果徳の二法は

妙法蓮華經の五字に具足す

我等この五字を受持すれば

自然に彼の因果の功徳を

譲り与えたもう

四大菩薩の領解に云く

無上の宝珠

求めざるにおのずから得

と御指南されていますが、これ

によれば、

——お題目は、久遠の本仏釈尊の
因行果徳の二法（たとえば血肉）

そのものであるのだから、このお題目を、たゞひたすらに但信口唱するならば、我々の何らの計らいもなくして、本仏釈尊の方から、その一切の功德が自然に譲り与えられて来るものである。その状態は、あたかも無上の宝珠を求めもしていないのに、おのずから得ることが出来るようなものであり、たとえば如来の願船に乗りさえすれば、迷いの世界から、悟りの世界へと、生死の大海上を渡ることが出来るようなものである――

というのです。

このように、既にお題目なるものが、久遠の本仏釈尊のすべての功德体そのものである以上、

――お題目を唱えるに当つて。その心を何處におくべきものであるか――

というなれば、勿論、お題目の主であり、お題目の功德を護り与えて下さる本仏釈尊の一念の中に

おかねばならない、ということはもはや申すまでもないことでありましょう。

ところが、とかく世の多くの人の中には、お題目を、日蓮大聖人のものであるとか、鬼子母神や七面大明神のものであるとか、或はお稻荷さまや、その他の守護神のものであるとか、変つたところでは、そうした特定の神々のものではなく、むしろ天地の神々も森

です。

またお題目を、天地宇宙の大真理とか大生命などといえど、如何にも結構な解釈のように聞えもし

羅万象も総括しているところの宇宙の大真理だと大生命、とうに思い込んでいる傾向があり強いようです。然し、これらはすべて飛んでもない錯覚というものです。

何故ならば、前述の觀心本尊妙の中にも、大聖人みずから端的に明示されているように、お題目なるものは、本仏釈尊一人の血肉そのものであつて、大聖人のものでなく、神々のものでもなく、はたまた守護神のものでもないからです。

ましようが、然し本仏釈尊の功德を抜きにして、お題目というものはありえないのです。法華經の真理生命というものを、自然科学的な真理や生命と混同してはなりません。この混同を犯したのが、実は真言宗であり、その流れをくむ諸宗教なのです。

大聖人は本仏釈尊の勅使として釈尊のお題目を受持色説し、勅使の使命として法華經を宣布されました。

また諸天善神は本仏釈尊の眷属として、釈尊のお題目によつて威光を増益し、その力によつて法華經の行者を守護するという誓願を果すことが出来るのです。

ましようが、然し本仏釈尊の功德を抜きにして、お題目というものはありえないのです。法華經の真理生命といふものを、自然科学的な真理や生命と混同してはなりません。この混同を犯したのが、実は真言宗であり、その流れをくむ諸宗教なのです。

若し、これをあやまつて、大聖人や神々を本尊とし、その中に唱題の一念をおくならば、利益の有無にかゝわらず、遂には本末倒顛して仏祖の本意にかなわないものとなつてしまふのみならず、

仏法は体なり、世間は影なり
体まがれば影なゝめなり

という大聖人の誠めの如く、人間社会の秩序も紊乱せしめてしまふことは、火を見るより明かであります。

釈尊が久遠の本仏といわれる以上、その眷属は、三世十方分身の他者は、たとえ大聖人であつても、本仏釈尊の眷属であり、そのお使いにすぎないのです。

大菩薩団、並に浄化の菩薩衆、行・安立行という、四大菩薩を上首とする六万恒河沙の、本化地涌等々その数は無量無邊であります

この世界を、本仏の久遠の淨土とも、大マンダラ仏界ともいうのですが、こゝには本仏釈尊を中心として、お題目の光りは十方に輝き、お題目の声は三千大千世界の虚空にもみちゝてゐるのです。

法華經の信仰とは、この仏界の中に住し、本仏釈尊を我等が主師親の本尊と仰いで、釈尊のお題目を但信口唱することです。

その時、三世十方の諸仏・諸菩薩をはじめ諸天善神までも飛び来て、行者擁護の誓願が果されることは申すまでもないことであり、その利益もまた無量無邊であります。

さて御質問によれば、

——お題目を唱える時、仏性開顕罪障消滅、祈願成就、世界平和といふ目的を達成しようと欲するところに、唱題の一念をおくべきであるか、どうか——

いうことにして、所詮、これからすべてのものは、たしかに信仰を激发し、或は増強せしむるものではあって、決して信仰の対境ではなく、むしろ信仰の結果として現われて来るところの功徳なのですから、唱題の心は、直接そうしたものにおくべきではなく、ひたすら本仏教尊の一念の中に、住するということを第一とし、その中にあつて、自己懺悔を信仰の基盤として祈念すべきものであると思ふよ。

くならば、永劫の時間を要する仏性開顕の曉までは、みずから唱題の一念もまた、仏性の開顕し難い凡夫の一念、煩惱業苦にみちみちた一念として、修行が厳しければ厳しいほど、片時も安心立命するこもなく、苛酷な責めをうけねばならないが、さもなければ、修行もいゝ加減にして観念的に走り「いまだ得ざるを、これ得たり」と思ふよような増上慢に墮ち入ってしまうことでしょう。

罪障の消滅にしても同様です。

本仏教尊の一念を抜きにして、直接こゝに唱題の心をおくならば、無始遠々劫來の無量深重なる罪障を消滅し尽したという証しを得るにしても、また広くは世界平和と

或は各種の祈願の成就ということにして、直接、自己の仏性開顕ということに唱題の心をお

までは、一辺の安心も法悦もなく罪に縛られ、罪におのゝいて行かねばならないか、さもなければ、根源的な自己懲悔の心も失つたまま、小さな信行体験を鼻にかけ、これを針小棒大に吹聴するような増上慢となつてしまふことでしょう。

う。

世界平和ということにしても、それは誠に高遠な悲願ではあります。しかし本仏釈尊の一念を拔きにして、直接こゝに唱題の心をおくならば、地上に全世界の平和が実現されない限り、自分自身の心の中にさえ、一辺の平和すら見出すことが出来ないばかりか、修行が厳しければ厳しいほど、まますす心が阿修羅の如く乱れるばかりか、或は如何にも自分一人が平和の使徒のような英雄気取りとなつてしまふことでしょう。

まことの法華經信仰は、決してこのような凡夫為本の行き方ではなく、あくまで本仏為本の行き方なのです。

本仏の世界は、既に久遠の昔より嚴然として完成しており、げに広大無邊なる、げに莊嚴きわみなき仏界なのです。その王座に不滅の本仏釈尊が嚴然としておられます。

無始の罪障をもつたまゝ、仏性をおゝう元品の無明煩惱をもつたまゝ、その身そのまゝで仏界に入ります。この身そのまゝで仏界に入ります。

法華經の信仰といふものは、何を見出すことが出来ないばかりか、はさておき、この本仏々界の中に住し、我が一念が、あたかも一滴

このことに關して大聖人は、文

永十年八月三日、佐渡ヶ島より身延の波木井実長公に対し送られたお手紙の中で、

一、末代の悪人等の成仏、不成仏は、罪の輕重によらず、たゞこの経の信、不信にまかすべし。

一、法華經のこゝろは、当位即妙不改本意と申して、罪業を捨てずして、仏道を成するなりと御指南されています。

蓋し、本仏の仏界に住するといふことは、観念的には、いとも簡単のようではありますが、實際この仏界そのものは、唯仏与仏の世界であり、凡夫の想像も絶する、いな凡夫の智慧も能力も、すべてが

尊われ粉砕されてしまうほど、莊嚴きわみなき素晴らしい絶対界であるということを、篤と銘記しておかねばならないことでしょう。

さればこそ、こゝにおいてはじめてすべての人々が、抜本的に改造蘇生せしめられ、本化地涌の菩薩として、本仏の仏界の中に涌出することが出来るのです。

地涌の菩薩の出現の当所とは、娑婆に即する本仏の仏界の中のみであつて、決して本仏を離れた單なる地上ではないのです。

唱題の一念を、本仏釈尊の一念の中におくべきであるという意義が、こゝにもありますよう。

身延山青年行学

講習会案内

醸悟園本妙庵における驚峰行学研修会につゝいて三月廿六日より廿九日まで三泊四日間、身延山西谷信行道場において身延山布教部主催のもとで蓮聖人と急仏宗・禪宗・真言宗・創価学会・キリスト教根本佛教と、その教義を比較検討を中心とした身延山青年行学講習会が開催されます。

会費は一人につき宿泊代二千五百円、記念写真代百五十円、米一升（代金の場合百八十円）

申込みは身延山布教部へ

編集後記

鷲峰一一月号

昭和四十一年通卷第四卷第二十七号

定価五十円 送料十円

昭和四十一年二月五日 印刷
昭和四十一年二月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井 醒悟園本妙庵

日高白象

印刷所 山梨県身延町梅平

藤田印刷所

發行事務所 山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰会

振替(甲府)二〇九三番

誌代 半年分 三六〇円 (送料共)
一年分 七二〇円 (送料共)
贊助会費 一年分 三〇〇〇円 (分納可)

★最近、宗門においても人材養成・法器養成ということが、特にやかましく言っている。日蓮宗新聞にも、立正育英会の拡充とか、布教研修所の充実ということとが鋭意進められているようである★然し法器養成の第一条件は何かといふと、いうまでもなく興学と布教であるが、その根底となるものは信心決定であり、そこから起る死身弘法の道念、その実践である★如何に学識や布教技術を身につけても、たゞそれだけでは所詮巧妙な宗教渡世者にすぎない★死身弘法の法器を養成するには、養成せんとする指導者みずから死身弘法体験と共に、その範を身を以つて示して行かねばならない★死身弘法とは自分の生命はもとより親・妻子・地位・財産までもかえりみない。とまでは言わなくてもせめて第二義的なものとすることである★そういう指導者が数いるならば、敢て法器養成の声ばかり上げることもないであろう★そこでこれに關して次号三月号には、鷲峰会の運動方針を紹介してみることにする。

娑婆に即する十方仏土の中には、

久遠の本仏釈尊が毎日悲願の心をこめて

大音声に唱えつゝけているお題目の声

これに唱和する諸仏・諸菩薩・天地の神々のお題目の声

ならびに諸天のうちならす天鼓の響き

それは大調和の一大音響となつて、全宇宙にこだましている
法華経神力品に曰く、諸仏菩薩の声、及び彈指の声、普く十方の國
に聞えて、地みな六種に動ず……法華經寿量品に曰く、諸天天鼓を
擊つて、常にもろノヽの伎楽をなす……と。

始めなき昔より終りなき未來にかけて

休むことのなき仏所護念の、此の大音響を心に聞けば

我々もまた、力強く法鼓を打ちならし

大音声にお題目を唱えずにはおられない

ましてこの地上に

邪智謗法の者、無智悪人の充満している姿を見れば
なおさらのことである